

原景としての故郷

——永井荷風とアンリ・ド・レニエ——

赤 瀬 雅 子

永井荷風の読書について、ほぼその全貌が掴めるのは明治30年代の半ばからである。明治42年2月、『毎日新聞』に載せた論文「レニエの詩と小説」によれば、「ゾラやゴンクールの小説は大抵読んで了つたし、又読まなくても全体の調子が解つてゐるので、何か変つたものはないだらうかと、フランスに居た時分下宿屋の人に聞いたところが、其の人は学校の教師をしてゐたが先づレニエかアナトール、フランスをお読みなさいと勧めて呉れた。そこで早速買つて読んだのが『ブレオー氏の会合』といふのであつた。」とある。

『ブレオー氏の会合』は、典雅な趣味、過去への追慕から、荷風が理想の小説と見做した作品である。

荷風はこの時、既にレニエの小説は10数冊出版されていることをも教わる。後年記された読書の記録には、レニエの詩はもとより、小説作品も多数精読した跡がみられるが、荷風の性情や傾向からすると、この明治42年2月に近い時期に、かなり精力的にレニエの作品を読んだのではなかろうかと推察される。

アンリ・ド・レニエは荷風が述べるように、博く学問をした人であり、ステファーン・マラルメに次いで、サンボリズムを代表する詩人、作家である。そして、その生涯を通じてベネチアへの極度の愛情を抱いていたことは周知の通りである。

レニエの詩作品も、ベネチアをうたったものが多く、彼のサンボリズムは、ベネチアを素材とせねば語り難かつたといつてもよからう。

詩作品より自由な小説作品においては、登場人物は、ことあるごとにベネ

チア讃歌を口にし、なにかと口実を設けては、可能な限り回数を多く、且つ許される限り滞在日数も多く、ベネチア行きを目指す面々が多い。彼等は四季夫々のベネチアの趣きを語り、ベネチアの路地の隅々、一つ一つの建物までに言及して倦まない。身は大抵パリにあって、俗悪撫雑な現代を罵り、時には家族友人知己などの輦轡をかいながら、1度び話がベネチアに及ぶと、恵比須顔になる人物もいる。¹⁾

アンリ・ド・レニエの故郷はオンフルールであるが、何処よりもベネチアを愛したこの文人にとっては、ベネチアは第2の故郷である。俗謡にいう“J'ai deux amours : mon pays et Paris.”²⁾は、万人に共通のことであろう。“Esquisses Vénitiennes”（『水都幻談』）は、1906年、レニエが42歳の折に書かれた散文詩の集成されたものである。この作品の中の一つ一つの章毎に、献呈する相手が異なっているが、献呈された友人知己は、いずれも風雅を解する貴族や教養人である。

“Esquisses Vénitiennes”は、次のような序詩ではじまる。

大運河の、あやなす小運河の、
水は緑、青、銀にして、
われらへめぐりぬヴェネチアの町を、
サン＝マルコ寺よりアルセレナかけて。

入江の風つよければ、
おお、ドガナ・ディ・マアレの岬よ、
われは見き、汝が風見の
いとやすやすと廻れるを。

アドリア海を吹く風の
軟風なれ、熱風なれ、
われは汝が指さすまよ、

フジナなりとマラモッコオなりと。

画舫は屋形のかげにわれらを揺り
へさきなる刃はそが腕もて
しじまを切りつつ進む、
潮風に眠れるしじまを。

エスクラヴォンが河岸の上
日は盤石をあたためぬ。
そが迷路も曲り角も、
ヴェネチアよ、われらことごとく知れり。

水は光りて、なめいしは裂け、
櫂と櫂とは相呼び相応へたり。
レッゾニコ宮の下、
すずしき影をすぎ行けば。

(青柳瑞穂訳)³⁾

この散文詩は、序詩を含めて25編から成っている。第3編は「幻覚」で、その第2節に次のようにある。

げにこは妖しくも美しき不思議なる地にあらずや。その名を聞くだに逸楽と憂愁の想ひ胸に湧く。試みに言ひ給へ、《ヴェネチア》と。されば、月光の沈黙を破りて、玻璃の碎くる音を聞き給ふらん……。《ヴェネチア》と。さればそは、一条の陽光を受けて、絹布の引き裂くるが如し……。《ヴェネチア》と。されば五彩は入り混じりて、変りやすき澄明の一色となるかに見ゆるを。魔法と奇術と幻覚の地にあらずや。

(青柳瑞穂訳)

その詩で、散文詩で、小説で、レニエはこの水都の名の響きを繰り返し、このように伝えてやまない。ついで視覚的な把握の例を挙げよう。

第7編の「ツァッテレ河岸」は、マチウ・ド・ノアイユ伯爵夫人に捧げられている。この編の第四節に次のようにある。

然り、いざ行かん、日あたたかにして、空も美しければ。河岸に荷揚げする船は、ロープより鈍き呻きを発す。何処の地にても、港に船の行き交ふを見れば、おのずと流離の思ひわくものを、誰ぞヴェネチアを離れんと思はんや。積荷の船の腹ふくらますとも、マストの帆綱をゆするとも、徒なれや。おお、ツァッテレ河岸よ、汝が石畳にわが靴底を、かの青銅の槌にわが背をあつる、これにまさる何ごとかあらん。

(青柳瑞穂訳)

このように水都を語ったレニエと、やはり水のある風景を愛した荷風の関係は、吉田精一、堀口大學、この作品の訳者青柳瑞穂、須永朝彦等の諸氏により、夙に論じられている。これについてはまた後に触れよう。

満4年と9箇月の欧米への留学を終えて帰朝した明治41年の暮、帰国後の疲れを癒す間もなく意欲的に作品を発表していた荷風は、その一環として、「深川の唄」を書き、翌明治42年2月、雑誌『趣味』に載せる。

「深川の唄」は小品ではあるが、二部に分かれている。留学中、紐育の高架鉄道、巴里の乗合馬車、セーヌ河の河船などに目的地も定めず乗る習慣を、何時の間にか身につけてしまっていた荷風は、或る日ふと、四谷見付から築地両国行きの電車に乗る。数奇屋橋を過ぎると、生活の苦勞をにじませた乗客の中に、下町の優しい女の話声が混じるようになり、木挽町の河岸から、人目を魅く丸髷の美人が乗って来て、たまたま乗り合わせた女学校の同級生らしい女性と話しはじめる。

「どちらまで行らっしゃいますの、私はもう、すぐそこで下りますの。」

「新富町ですか。わたくしは……。」

云ひかけた處へ車掌が順送りに賃錢を取りに来た。赤いてがらの細君は帯の間から鹽瀬の小さい紙入を出して、あざやかな発音で静かに、

「のりかへ、ふかがは。」

「茅場町でおのりかへ。」と車掌が地方訛りで蛇足を加へた。

とあるのは、レニエが、ベネチアという都市の名の音の響きに魅せられて、何度もこの名を口ずさんでいた様が髣髴する。「深川の唄」のさわりの1節を挙げよう。

橋の向角には「かしぶね」として真白な新しい行燈と葎簀を片寄せた店先の障子が見え、石垣の下には舟板を一板を残らず綺麗に組み並べた釣舟が四五艘浮いてゐる。人通りは殆どない、もう四時過ぎたかも知れない。傾いた日輪をば眩しくもなく正面に見詰める事が出来る。此の黄味の強い赤い夕陽の光に照りつけられて、見渡す人家、堀割、石垣、凡ての物の側面は、その角度を鋭く鮮明にしては居たが、然し日本の空気の是非なさは遠近を區別すべき些少の濃淡をもつけないので、堀割の眺望はさながら舊式の芝居の平い書割としか思はれない。それが今、自分の眼には却って一層適切に、黙阿彌、小團次、菊五郎等の舞台をば、遺憾なく思ひ返させた。あの貸舟、格子戸づくり、忍返し……。

久保田万太郎の述懐⁴⁾、「……わたくしは“深川の唄”を、たまたまその『趣味』といふ雑誌で読んだとき、実際、さうした奇蹟が来ての、急に目のまへが、豁然とひらけたのを……」を敷衍して、文学史上の位置を要求できる程の意義を、この作品は含んでいる。全盛を誇った自然主義にようやく飽き始めていた読者に、「『最も新しい文学』といふものが、いま、どこまで来てゐるかといふことを、はっきり、わたくしに教えてくれたのである。」と久保田万太郎も更にたたみかけて述べている。

荷風の帰朝後の一連の作品に書かれた江戸の名残を止める東京こそ、まさしく荷風にとっての原景としての故郷である。そしてこの故郷は、自然に形成されたものではなく、複雑な過程を辿って形成され、いくたびか形を変えながら、荷風の裡に定着して行ったものであった。

荷風は明治44年3月、靄山書店より刊行された『すみだ川』に、次のような序文を載せる。

小説すみだ川を草したのはもう4年ほど前の事である。外國から歸つて來た其の当座12年の間は猶かの國の習慣が抜けないために、毎日の午後といへば必ず愛書をふところにして散歩に出掛けるのを常とした。然し、わが生れたる東京の市街は既に詩をよろこぶ遊民の散歩場ではなくて行く處としてこれ戦乱後新興の時代の修羅場たらざるはない。其中にも猶わずかにわが曲がりし杖を留め、疲れたる歩みを休めさせた處は矢張いにしへの唄に残った隅田川の兩岸であつた。隅田川はその当時目のあたり眺める破損の实景と共に、子供の折に見覚えた朧ろなる過去の景色の再来と、子供の折から聞伝へてゐたさまざまの伝説の美とを合せて、云知れぬ音楽の中に自分を投込んだのである。

母方の祖父は尾張藩の藩儒である鷲津毅堂、父は毅堂の愛弟子で、大学南校、コロンビア大学に学んだ著名な漢詩人永井禾原という血を受け継ぎ、小石川区金富町に生まれた荷風は、典型的な山の手の子である。

荷風のエッセー、メモワールの類の作品や、小品には、山の手たたずまいが、リアルに、克明に描かれている。また『冷笑』のような文明批評を前面に押し出した作品に、下町と対照的に描かれる山の手雰囲気描写は、余人の追隨を許さないものがある。しかし荷風の意識の上では、時として故郷はむしろ東京の下町であつた。それは荷風の反俗、反抗と結びついている。

文部省を退官した後、日本郵船に入社し、上海支店長となった父と過ごすため、明治30年初秋、上海に渡った荷風は、17歳とは思われない醒めた目で、

上海の裏面を見ている。⁵⁾

3月足らずの滞在の後、間もなく18歳になろうとする晩秋、11月末には帰国するがこの頃から、後に自身の故郷を、東京の下町とも思うような生活が始まる。7月には高等学校の入学試験に失敗していたので、帰国早々、高等商業学校付属学校清語科に入学するが、この入学は、自分の意に適うものではなかった。翌明治31年9月には、処女作「簾の月」を懐に、牛込矢来に住む広津柳浪を訪ねて弟子入りする。

柳浪は周知のように硯友社の客分で、技量は硯友社の領袖紅葉以上といわれた作家である。なお、硯友社は玄人中の玄人の作家集団であった。師柳浪に才能を属目された荷風は⁸⁾、この時期、先ず技法を磨くことに真剣であった。そして人情噺に関心を抱き、明治32年には朝寝坊むらくの弟子となり、翌33年には歌舞伎座の立作者福地桜痴の弟子となった。むらくの弟子としては前座を勤めるようになり、夜毎山の手の実家から下町の寄席まで、両親の目をかすめて通うようになった。桜痴の弟子としては楽屋で拍子木を打つ稽古もした。

明治33年、19世紀最後のこの年は、荷風にとって画期的な年であった。この前年すでに「野心」などを出してはいたが、「おぼろ夜」、「濁りそめ」、「をさめ髪」、「闇の夜」、「花ちる夜」、「四畳半」、「青簾」などを書き、このうち「闇の夜」は、『新小説』の懸賞当選作となった。これらの作品の背景は、好んで東京の下町にとられている。これらの小品には、取り立てて筋の面白さといったものはないが、すでに会話の巧みさ、歌舞伎の世話物の筋の運びを思わせるテンポなどにみるべき点がある。そして荷風はこの時すでに滞在体験のある上海、後に行くことになるニューヨーク、リヨン、パリなどを除き、日本においては、生まれ育った東京以外の地を作品の舞台とする意図を、全く持たなかったといってよい。それは志を立てて上京した地方出身の作家が、作品の背景を東京にとるのは意味が異なる。

そして翌明治34年には、福地桜痴に伴われて入社した『日出國新聞』に、最初の新聞連載小説『新梅ごよみ』が載る。その予告に「優麗の筆致、恰も

読者をして歌麿の濃艶なる浮世畫美人に対する思ひあらしむる者は、荷風子の小説なり。此編題して新梅暦といふと雖も、敢て尽く春水の旧態を模擬したるに非ず。細密緻巧なる言文一致の才筆を以て、其の描出す所の果たして如何なるかは、予め此に云はざる可し。」と書かれた。

吉原を出て、例の土手を下りる。片側は鉄漿溝、片側は何か牧場を見る様な水溜の沢ある廓の火避地、荒物屋、駄菓子屋研物屋など、小家勝ちの道を少し行って、交番所と火見梯子のある四つ角を左にへ折れると龍泉寺町と云ふので。

前は一面に田圃を控えた垣根囲ひ、中々広さうな一構の地面がある。種々の庭樹も鬱然と茂っているけれど、建家は極く小締りと為て居る様子で、門口さへ目立たぬ小さな潜門。表札には唯「笹野」と小さく二字書いてあるばかりである。

この『新梅暦』の冒頭とも似たような下町の川沿いの家の、明るい二階で、春水などの人情本を繙くのは、青春時代の荷風のひとつの理想であった。『新梅暦』は勿論、春水の傑作『梅暦』をなぞる必要から、東京の下町も繁華な地区を外れた辺りの長閑なありさまを、『梅暦』とは場所を少しずらしながら描いている。『梅暦』はこれを子細に読めば、江戸音曲論であり、「如何にして清元を学ぶか。」が、中心の主題である。許されることならば誰にもはばかりず、荷風には下町のこのような地区で趣味的な読書と江戸の音曲を習うことに若い日を費やそうとしていた一面のあったことは否定出来ない。

朝寝坊むらくの弟子となって前座を勤めていた時、寄席の撥ねた後、下座の娘と連れ立って帰る道すがら淡い恋を語り合ったのも、川沿いの町であった。後年、いわゆる「花火」の事件、「大逆事件」の囚人護送車を見てそれを如何ともすることの出来ない身を自嘲し、自らを戯作者と称して引き籠もった所も、下町であった。

一方、荷風が巖谷小波の木曜会に出席するようになったのも、むらくに弟

子入りした明治32年のことであった。そして荷風は間もなくこの会の席上、はじめ英訳を通して読んでいたゾラを自ら講じるまでになる。

ゾラの作品においては、闇夜に蠢く、あるいは野心や奸計に満ち、あるいは貧苦や病苦に苦しむ人々の生活は、第二帝政時代下の、主としてパリを背景としている。

荷風は人情本の世界から、一飛びにゾラの世界に耽溺するようになって行ったのであった。明治35年4月には『野心』が美育社より、9月には『地獄の花』が金港堂より、翌36年には『夢の女』が新声社より出版された事も、ゾラ研究の成果であった。

殊にこの3作の中で抜きん出て芸術的完成度の高いものは、『夢の女』である。荷風の真の作家的出発を『夢の女』からと見做すことが、もっとも順当であろう。ここには春水の人情本、師柳浪の「今戸心中」、「浅瀬の波」をはじめとする深刻小説、エミール・ゾラ等の影響が渾然一体となり、融合している。水のほとりの街のたたずまい、湿度の高いこの国の季節の推移の微妙さ、苛酷な運命を「この世は夢」と諦めて⁶⁾、運命に逆らわず暮らす人々など、後年の作品を構成する要素がすべて出ている。『夢の女』の一節を挙げよう。

長い鉄橋の欄干には既に電氣灯が輝いて居る。かすかに夕の星影も三ッ四ッと、憂鬱なる蒼白い空から燦き初めると、広漠たる河口の空を遮る佃島や石川島の建物、さては兩岸に立連なる人家の屋根は、等しく暗い夜の影の中に沈まうとして、新しい灯火の光は殆ど数限り無く水の上に流れた。林の如く帆柱を連ねて碇泊して居る帆前船からも、同時に青い色や赤い色の灯が、或は高く或は低く花火を見るやうに散乱する。お浪は橋の半程まで行き掛けながら立止るとも無く欄干に身を倚せた。すると偶然にも思起されるのは幾年かの昔、遠い故郷の地を離れて深川の遊廓へ身を沈める為め、初めて此の長い鉄橋を渡った時の事である。丁度今宵のやうに燦爛たる灯火に飾られた河波が海から吹き付ける風につれて石台に激する音、汽

船の笛の音、さては橋板を轟かしつつ我身を載せ行く車の響きなぞ、其れ等は今も猶明かに耳の底に残つて居るやうに思はれる。

こうした風景もまた、荷風の持つ原風景である。人々は河のほとりで生活を営み、その人生模様を織りなして行く。これが石で出来たヨーロッパの都会であれば、ゾラ、モーパッサン、フロベール等、幾多の自然主義の小説家達がなめまわすように描き、ついでレニエが、さらに時代が下ってはジュリアン・グリーンが⁷⁾、そこにあたる日射しを、夕暮の微妙な翳りを、縷々表現の可能性を探りながら浮き彫りにした建物のひとつひとつに感服し、模倣することも出来たであろう。

しかし荷風の原風景には、どっしりした石像建築はない。木造の腐れ落ちんばかりになった脆い橋、小さな名もない橋に、荷風は詩情を見出す。留学前にはさほど認識していなかったが、ヨーロッパの画壇を震撼させた浮世絵は、単に絵画上の技法として見られたものではなく、欧州の画家達に日本の生活に対する深い共鳴さえも産み出したのを識った時の荷風の喜びは計り知れなかった。

荷風は生涯にわたり、興の赴くままに気に入った書物を精読している。その中には数冊の自作も混じっている。精読した書物は、幅ひろい。浮世絵論などは、荷風の小説作品をある意味で凌駕している。

再び「深川の唄」を引用してみよう。

数年前まで、自分が日本を去るまで、水の深川は久しい間、あらゆる自分の趣味、恍惚、悲しみ、悦びの感激を満足させてくれた処であつた。電車はまだ布設されてゐなかつたが既に其の頃から、東京市街の美観は散々に破壊されてゐた中で、河を越した彼の場末の一劃ばかりわづかに淋しく悲しい裏町の眺望の中に、衰残と零落との云尽し得ぬ純粹一致調和の美を味はして呉れたのである。(中略) 不動様のお三日と云ふ午過ぎなぞ参詣戻りの人々が筑波根、繭玉、成田山の提灯、泥細工の住吉踊の人形なぞ、

さまざまの玩具を手にさげた其の中には根下りの銀杏返しや印半纏の頭なども交じつてゐて、幾艘の早舟は櫓の音を揃へ、碇泊した荷舟の間をば声を掛け合ひ、静な潮に従つて流れて行く。水にうつる人々の衣服や玩具や提灯の色、それをば諸車止と高札打つたる朽ちた木の橋から欄干に凭れて眺め送る心地の如何に絵画的であつたらう。

俗悪蕪雑な日本の近代、明治の匂いのしない所、深川はそんな場所のひとつである。そして荷風はそこにずっと居続けたいと思う。

自分はふと後を振向いた。梅林の奥、公園外の低い人家の屋根を越して西の大空一帯に濃い紺色の夕雲が物すごい壁のやうに棚曳き、沈む夕日は生血の滴る如く其の間に燃えてゐる。真赤な色は驚くほど濃いが、光は弱く鈍り衰へてゐる。自分は突然一種悲壮な感に打たれた。あの夕日の沈むところは早稲田の森であらうか。本郷の岡であらうか。自分の身は今如何に遠く、東洋のカルチエエ・ラタンから離れてゐるであらう。

ここに描かれた原風景は、浮世絵の中のそれである。正確に云えば、ヨーロッパ人の目に映った浮世絵の世界である。ちょうどヴァン・ゴッホが浮世絵を必死に模写した後、独自の画境に到達したやうに、荷風も何とか故国に適応しようと試みた。

ゴッホ、セザンヌをはじめとする一群の画家達には、浮世絵を通して見た日本は、憧れの国であつた。蕪雑な近代を避ければ、何とか故国でも生きられるのではなかろうか。荷風の中には生涯、このような気持が、潮の満干のやうに一定の間をおいて訪れてくる。幾種類かの浮世絵論も、そのことを物語っている上、実は荷風の戯曲の底流を流れる重要な主題は、この原風景の問題ではないかと思われるのである。

志村信英氏は『碧玉の杖』に関する論述の中で、次のやうに述べる。

レニエの小説には多くの場合、事実の裏付けがある。彼の小説には必ず或る「場」があって、これを背景に話が展開する。それはもっぱら「館」であり「町」であり、それに付随する「庭園」であり「港」でもある。これらなくしては彼の小説が存立しないことは『碧玉の杖』でも明らかであるが、この傾向はどんどん強まり、1899年にヴェネツィアを知るにいたって館も町も庭も港もみな統合して畢にこの「都」が決定的な背景となる。そして以上の「場」が必ずしも背景ではなく、ときに主題であったことが判ってくる。

つぎに「深川の唄」などのエッセー風の作品をものした後に書かれた「すみだ川」を見たい。「すみだ川」は、まさにすみだ川の河畔に繰り広げられる人々の生活の絵巻である。しかしその色調は、作者の若さを抑えて、淡い。レニエとの類似が、従来指摘されて来たのは、志村氏と同じ視点からである。⁸⁾

先ずここでは更に具体的に、レニエとの関連を考察してみたい。先ず、荷風自身の「大正二癸丑の年春三月小説すみだ川幸に第五版を発行すると聞きて」の一部をみよう。

さればこの小説一篇は隅田川といふ荒廃の風景が作者の視覚を動したる象徴的幻想を主として構成せられた写実的外面の芸術であると共に又この一篇は絶えず荒廃の美を追究せんとする作者の止みがたき主観的傾向が、隅田川なる風景によつて其の叙情詩的本能を外発さすべき象徴を搜めた理想的内面の芸術とも云ひ得やう。さればこの小説中に現はされた幾多の叙景は篇中の人物と同じく、否時としては人物より以上に重要な分子として取扱はれてゐる。それと共に篇中の人物は實在のモデルによつて活ける人間を描写したのではなくて、丁度アンリ・ド・レニエエがかの「賢き一青年の休暇」に現したる人物と齎しく、隅田川の風景によつて偶然にもわが記憶の中に蘇り来つた遠い過去の人物の正に消え失せんとする其面影を捉

へたに過ぎない。

“Les vacances d’un jeune homme sage”⁹⁾と「すみだ川」とは、筋においての類似性は全くない。しかし“Les vacances d’un jeune homme sage”から筋においてインスピレーションを得てはいる。このことは興味深い。

un jeune homme sage, 直訳すれば、真面目な一青年の意である。アンリ・ド・レニエのこの作品にあっては、1880年代の或る年の7月に大学入学資格試験の口頭試問で失敗したジョルジュ・ドロヌが主人公である。ジョルジュの生まれた家庭には、紋章学に凝っている叔父が、何とか一族を由緒正しい大貴族の末裔であると定義したくて躍起となり、一族もそれを擁護しているというような雰囲気満ちていた。そしてジョルジュはドミ・モンデーヌに関心を持ち、未亡人に恋をする。

アンリ・ド・レニエの小説の筋のみを解説すれば、プルーストとを髣髴するが、プルーストの模倣あるいはパロディとは言えない。たくまざるユーモアの中に、「せめてこれらのページが読者に我がことを思ひ出させるよすがとなれば幸ひである。何故となれば、人々はそこに、15の齡にはわれらを深く感動させるも、年経れば、恰も過去を振り返つて微笑むごとく、懐しく哀しく、われらを微笑ませる小事件の数々が物語られてゐるのを見出すであろうから。」¹⁰⁾と述べ、16歳のジョルジュに焦点を当てている。ジョルジュはプルーストの作品の主人公達のように、時間の重層構造の中から、現代のこの場に飛び出して来るような魔力は持たない。旧い過去から、本のページにおさまったまま、読者に語りかけるだけである。

荷風の「すみだ川」の主人公長吉は、旧制中学の上級生であり、ジョルジュとほぼ同年齢である。この作品の題名、「すみだ川」は変えがたい題名であるが、フランスの古風な小説風に、もし副題をつけるとすれば、まさしくUne histoire d’un jeune homme sage となろう。¹¹⁾ ジョルジュが恋を夢み、それを追っていたのに対して、長吉は、この年齢であった時の荷風の、あら

ゆる憤懣、絶望といったものを背負はされている。

いつも畫学と習字にかけては全級誰も及ぶもののない長吉の性情は、鉄拳だとか柔術だとか日本魂だとか云ふものよりも全く異つた他の方面に傾いてゐた。子供の時から朝夕に母が渡世の三味線を聴くのが大好きで、習はずして自然に絃の調子を覚え、町を通る流行歌などは一度聴けば直ぐに記憶する位であつた。小梅の伯父なる蘿月宗匠は早くも名人になるべき素質があると見抜いて、長吉をば檜物町でも植木店でも何処でもいいから一流の家元へ弟子入をさせたらばとお豊に勧めたがお豊は断じて承諾しなかった。のみならず以来は長吉に三味線を弄る事をば口喧しく禁止した。

主人公長吉は、下町の子である。父を亡くし、母が常磐津の師匠をしながら暮らしを立てている。長吉は将来、芸事で身を立てたかった。しかし母は番頭を養子として自分と結婚させた実家の商家の没落を教訓として、息子を堅いが上にも堅い月給取りにしたいと考えている。そして事々に長吉に意見し長吉を監督し、中学校高等学校大学と進ませ、卒業のあかつきには官庁か会社に入った長吉が出世して行く有様をのみ思い描いている。

正月も七草を過ぎたころインフルエンザに罹って二十日も学校を休んだ長吉の落第は、決定的となった。それを幸い、家でぶらぶらしていた長吉は、散歩に出て、ふと浅草公園の裏手の芝居小屋に入る。¹²⁾ 演し物は「梅柳中宵月」すなわち十六夜清心の悲恋を描いた世話狂言であつた。「遠くの騒ぎうた唄、富貴の羨望、生存の快樂、境遇の絶望、機会と運命、誘惑、殺人。」など、波瀾を極めた芝居は、身につまされた。

長吉は病後の夕風を恐れてますます歩みを早めたが、然し、山谷堀から今戸橋の向に開ける隅田川の景色を見ると、どうしても暫く立止まらずにはゐられなくなつた。河の面は悲しく灰色に光つてゐて、冬の日を終りを急がす水蒸気は対岸の堤をおぼろに霞めてゐる。荷船の帆の間をば鷗が幾羽

となく飛び交ふ。長吉はどんどん流れて行く河水をば何がなしに悲しいものだと思つた。川向の堤の上には一ツ二ツ灯がつき出した。枯れた樹木、乾いた石垣、汚れた瓦屋根、目に入るものは尽く褪せた寒い色をして居るので、芝居を出てから一瞬間とても消失せない清心と十六夜の華美やかな姿の記憶が、羽子板の押絵のやうに又一段と際立つて浮かび出す。長吉は劇中の人物をば憎い程に羨んだ。いくら羨んでも到底及びもつかないわが身の上を悲しんだ。

このように土地と登場人物の心情とが見事に一致しながら、筋が展開して行く。アンリ・ド・レニエの場合はどうであろうか。

リヴレエは美しいとか、きたないとかいへる町ではなかつた。それは小ざつぱりした、裕福な、小さな田舎町で、ヌーヴィルとガールの二つの郊外を持つてゐる。やや頽れたゴシックの相当古い教会があり、人形を一面に細かく彫りつけた十六世紀の町役場があり、菩提樹を植ゑた公設散歩場があり、養老院があり、それに、堂々たる邸宅が幾軒かある。それには古い時代の建物もあれば、近世風なものもあつて、いづれも庭がある。かうした邸宅はその殆どすべてが一年のこの季節には鎧戸を閉めきつてゐる。そして、その持主はリヴレエで謂ふところの《上流社会》を形成してゐて、町の残余から成る世間と対立してゐる。《上流社会》は冬しかリヴレエに居住してゐない。夏は、山や海の別荘に行つた。リヴレエはさびれてゐる。

レニエの祖先は、北フランス、アルデーヌ県のラ・ロップの城館に住んでいた。祖父は五歳の時、革命を逃れてドイツ亡命した体験を持っている。後祖父はブルターニュに住んだため、レニエの父にはブルターニュが故郷であつた。レニエ自身は七歳までを其処で過ごしたオンフルールの生家を懐かしんでいる。レニエの父方と母方は遠い姻戚関係にあるが、母方はブルゴーニュ

地方のパレル＝モニアルの出である。『真面目な一青年の休暇』はこのパレル＝モニアルを背景として書かれている。父母自身の思いでが付き纏っている地方、故郷オンフルール、七歳より没するまでずっと暮らしたパリの十六区などを、執拗なまでの愛着を持って作品の中に取り込んでいる。¹³⁾

そして、それに陰影をつけるためのレニエの手法は、フランスの小説に共通する技法でもあるが、それを追ってみよう。

ジョルジュ、ドロヌヌがリヴレエに来て最初の週間は事もなく過ぎた。退屈はしなかったが、しかし、海岸に行つた前の年の休暇がちよつとばかりなつかしかつた。彼はサン・マロを思ひ出す。狭い曲りくねつた通りや、船主の高い家々や、城砦の散歩場や、浜辺や、苔の生えた岩を思ひ出す。あの奇妙な土地の、サン・マロ独特の海の匂ひを未だに呼吸してゐるやうな気がする。母はランス河をのぼつてディナンの町に連れて行つてくれたつけ。それからモンにも一しよに行つた。その前の年はディエプに避暑した。彼は海水浴を思ひ出す。イリュミネーションで飾られた、騒々しいカジノを、アルクの城を、ブールヴィルと、ヴァランジュヴィルの海岸町を、アングオ邸を思ひ出す。そのあたり一帯は、沖の風で一方に傾いた美しい樹木と、崖ぶちまで生えている小さな松林に蔽はれてゐた。¹⁴⁾

俗にフランス人が旅をすると、眼前の景色や建造物、物珍しい風俗をした人々などを目前にししながら、前に体験した旅行のことばかりを話すといわれる。現に行っている旅にたいする不満はさておくとして、これはフランス人が絶えず複眼的に比較しながら事物を見ることと、時間の重層構造の中に身を置くことに或る種の快感を覚えることとを物語っているのである。

周知のように、レニエがベネチアを熱愛した時、他の都市、他の国は、古典的な教養人であるこの作家の頭から、一時消え失せる。貴族としての血への思いも、水のある故郷オンフルールへの懐旧の情も、パリへの讃歌も、すべてベネチアにおける時間の流れ、歴史の凝縮した姿に託される。因みにレ

ニエは二十歳の時、南フランスへの一人旅を体験し、フランスの中の地中海世界に触れている。なおレニエは三十代半ばの1899年にベネチアを訪れて以来、イタリア、トルコ、ギリシャ、シリア、北アフリカ等の地中海に臨む街々を見た。しかし幾多の地中海世界の美しい都市も、レニエにとって、アドリア海を臨むベネチアに勝りはしなかったのである。

アンリ・ド・レニエの懐古趣味、貴族性をよく理解した荷風は、同時にレニエの作家としての矜持に共感した。

二十代半ばに渡米し、数年の欧米滞在を経て三十代を迎えて故国に帰った荷風は、鳴物入りで迎えられたが、旺盛な創作欲を燃やして書いた一連の作品の中、『冷笑』を、みずから度々読み返して楽しんでいる。『冷笑』とは、要約していえば、故国の明治という時代にたいする「冷笑」である。新進気鋭のこの作家の分身達は、主として東京のいたるところで明治を「冷笑」しながら、しかし「江戸切絵図」に明治を重ねるようにして、失われてしまった故郷を懐かしんでいる。荷風の故郷は、過去の中にある。こう感じる人は少なくなかろうが、レニエや荷風のような作家にあっては、それなくしては作品は成立しない。彼等は、直接、過去の時間の堆積の中に養分を求める作業に没頭する。

『冷笑』の中の八笑人は、瀧亭鯉丈の『八笑人』に準えて、荷風が創造した分身である。¹⁵⁾ その分身の一人、気鋭の作家吉野紅雨が、やはり分身であり、この作品の主人公として狂言回しの役をも担う銀行頭取の小山清と会って述べる台詞に次のようにある。

「この頃は何か新しいものをお書きですか。」

「ええ。暴君といふ脚本体の詩を書いて居ます。」と紅雨は答る。

「ははァ……。」

「あなたも御存じでせう、中世紀の佛蘭西に Barbe bleu と云ふ暴君が七人の妃を一人々々に殺して行つた話は、Huysmans も Maeterlink も Régnier も書いてゐますが、私はそれから思ひついて、将門と瀧夜叉姫

を一緒にして恐しく残忍苛酷なものを書いてみやうと思つて居るんです。」

吉野紅雨の目標とする作家は、ユイスマンス、メーテルリンク¹⁶⁾、アンリ・ド・レニエという、当時最も問題とされた、夫々が一方の雄である作家であった。

フランスの小説の思想性、方法上の冒険を好む傾向、言語・文体への厚い信頼は、伝統的なものである。若かった荷風はそうしたフランスの小説の伝統を受け容れ、それを血肉化しようとした時、いささか気負い過ぎた誇張はあるが、「将門と瀧夜叉姫を一緒にし」たものを書いてみようという言葉が出て来たのである。それは化政期以後の末期浮世絵の頹廃の美に、新しい意義を見出すものでもあった。東京の中の歴史的建造物¹⁷⁾に、この小説の登場人物が接近する方法も、「チャリネーの曲馬を賞し、近頃では活動写真を喜ぶやうに」故国に迎えられた人の方法であった。

紅雨は生涯忘れない美的感激の極度を経験したと信ずる巴里の有名なる建築物に対した時の心持ちに思ひ比べて、芝の霊廟はそれに優るとも決して劣らぬ感激を与へてくれたことを感謝した。其ればかりでなく、彼は又鋭角的なるゴシック式の建築が能くかの民族の氣質を伝えるやうに、この方形的なる霊廟の構造と濃厚なる彩色とは甚だよく東洋固有の寂しく驕慢なる、隔離した貴族趣味を説明してくれる事を喜んだ。猶其れの上に止まらず、紅雨は門と玉垣によつて作られた二段三段の区劃を眺めてメーテルリンクやレニエエなどが宮殿の数ある柱や扉によつて用ひたやうな、象徴芸術の真髓を会得したやうにも感じた。

歴史的建造物、いまだにこなれていない、直訳体のこの言葉を無理にも頭の中に思い浮かべて、荷風は東京の中を歩く。しかし出会うのはこの国の宿命である極めて湿度の高い湿った大気と、木造の、地面に這いつくばって建てられている建物であった。また紅雨は隅田川の辺に閑居する漢学者の父を

訪ねた時、次のように述べる。

紅雨は江戸趣味の追懷で、「待乳沈んで」とか「橋場今戸の朝煙」とかさまざまな歌曲から、いかに現在は製造所の煉瓦造や煙突で俗化されても、其の懐しさは決して消えやらぬ隅田川。都市を両断して流れる事から訳もなく自分勝手にこじつけてセーヌ河の上流の如くにも思ひなす隅田川の風景を、忽ち眼の前にそが空想の色彩を加へて実景よりも更に美しく、自己の趣味に適合するやうに描きだした。

荷風は故国の現実の中で、常に「自己の趣味に適合するやう」に現実を歪曲して見る姿勢をとらざるを得なかった。しかしその切り口の何と鮮やかなことであろうか。荷風を俟ってはじめて、俗悪蕪雑な明治を乗り越えて、江戸の街々は活々と蘇る。

歴史的建造物に満ちた都市を愛するには、万人の目に愛でられる、どのような時にも存在感のある建物が多く存在しなければならない。例を挙げよう。

『真面目な一青年の休暇』と同じように、青年を主人公にしたレニエの『燃え上がる青春』¹⁸⁾という小説がある。主人公の名前はアンドレ・モオヴァール、外交官志望のパリ大学法学部の学生である。青年らしい悩みを抱きながら、彼はカルティエ・ラタンを逍遙する。

街のつき当りには、美術学校の建物が立ってゐた。鉄格子を廻らした庭を前にして、このどこか書割めいた、何かかう時代劇の役者の登場を待つてゐるやうな、この眺望をアンドレは好きであつた。大きな建物を奥にして、その前には、広い敷石の庭が広がつてゐた。彫像や、円柱や、建築の破片や、他所から持つて来た石壁やを置き並べて。此等のものが集まつて、一箇調和のある全体を形造つてゐた。それは巴里の真中に在つて、人工的な古風な一劃を成してゐた。ゴチックとルネッサンスとが、事もなげに相並んでゐた。学生の参考用の、この習成が、見る眼に快かつた。¹⁹⁾

パリは有名無名の人々の無数の眼によって、長い間にわたってこのように凝視され、愛されてきた。例え芝の霊廟ひとつにせよ、荷風以外の誰が東京の monument historique を正面から小説作品の中で取り上げたであろうか。レニエがパリを、あるいは他の小都市を場として小説作品を創ったようなことは、荷風には不可能であった。脆弱な木造の橋に、江戸の過去を偲ぶしかなかった。²⁰⁾『冷笑』の中で、荷風は分身の一人として、絶えず日本を留守にしている上、例え日本に寄港しても港街のカフェ以外には行かないような商船の事務長、徳井勝之助を登場させる。勝之助は「心の底から例へ一瞬間でも自分の父を愛したい、敬ひたい。さうするには却つて父より遠ざかつて、遠洋の果から漂泊の夢にふと生れた家の事を思ひ出して見るのが一番よい」という、「絶望的な高い倫理感を抱いてゐる」人物である。アンリ・ド・レニエとピエール・ロティは、荷風が生涯愛読した作家であったが、原型としての故郷という見地から見る時、ロティは荷風がレニエの世界に徹することの不可能性を悟った時に見出した唯一の作家と見る事が出来よう。

〔注〕

- 1) レニエの一分身といった作中人物に、この傾向が顕著である。
- 2) ジョゼフィン・ベーカーなどが唄った1920年代のシャンソンの一節。
- 3) 青柳瑞穂(1899-1971)はつとに荷風とレニエの關係に言及した文学者の一人である。
- 4) 久保田万太郎(1889-1963)の独特の文体での述懐に注目したい。
- 5) 作品「烟鬼」にこの上海体験がまとめられた。
- 6) 独自の文明批評を開陳する「妾宅」に、「この世は夢じゃあきらめしゃんせ……」という一節のある俗謡が引用されている。
- 7) ジュリアン・グリーン『パリ』1983年刊
- 8) 吉田精一の説である。
- 9) 原題を直訳すれば「真面目な一青年の休暇」である。青柳瑞穂は私見として“sage”は訳す必要がない旨を述べている。
- 10) 青柳瑞穂訳。
- 11) 副題としてはその前に“Une histoire d'”と加えるべきであろう。

原景としての故郷

- 12) いわゆる小芝居の小屋である。
- 13) パリの区の中で、区としては最高級の住宅地。更に狭い区分ではこれに勝る界限もある。
- 14) 青柳瑞穂訳。
- 15) 『冷笑』の八笑人は八人には満たないが、いずれも例外なく、荷風の分身である。
- 16) Maurice Maeterlinck は、フランス語読みでメーテルランクとすることもある。
- 17) Monuments historiques は、例えばパリの建造物に高い比率を占めている。
その概念も、欧州の都市に相応しい。
- 18) 堀口大學訳
- 19) 堀口大學訳
- 20) 荷風が好む、主客の閑談という様式の小品の中で好んで繰り返される主題である。

(1989. 9. 26 受理)